

〔現地通信〕

ノマドの末裔たち
～サラワク・プナン社会のフィールドワーク～ (1)

奥野克巳 (桜美林大学国際学部)

*

周知のように、1970年代の解釈人類学以降、人類学はしだいにテキストをめぐる問題の検討へと傾斜していった。民族誌記述は、部分的な真実でしかなく、民族誌家が他者を一方的に表象する点において、植民地時代以降の権力関係を再生産しつづけているという自己批判的な議論が盛んに行なわれるようになり、人類学は、人類学者の調査態度やその背景にあるポストコロニアルな構造をめぐる問題検討の袋小路へと入り込んでいった。

そのような議論を経て今日、問題を迂回して、現代社会に生起する問題状況に焦点をあてたり、実践的な活動にコミットしながら仕事をしたりする人類学者が多くなってきている。私には、そのようなフィールドワーク (と、その結果としてのエスノグラフィー) の多くは、一方で、同時代的に重要かつ示唆的ではあっても、他方で、スリリングさに欠け、志そのものが萎んでしまっているように思える。人類学が、その学の起源に持っていた人間 (人類) の探究という理想から遠ざかってしまっているからである。

はたして、ふたたび、人間探究の森の深くにまで分け入る人類学は可能であろうか。現代社会からすればなじみの薄い文化や人間集団を対象として、人類の多様なあり方へと目を向けて、現代社会に対しても、起爆力あふれる人間観を発信できるような民族誌研究を、ふたたび、人類学の奔流とすることはできないだろうか。

**

そのような思いを抱きながら、私は、与えられた一年間の学外研修期間 (2006年4月～2007年3月) を、われわれが自明とする現代日本社会とは異質な生活モードを持つ人びとが暮らす共同体において、新規にフィールドワークをすることを心に描き、マレーシア・サラワク州へとやってきた。自然の恵みから生きるための糧を得るといふ、太古からの人類の活動である狩猟に依存する人びとの居住地を探る過程で、ラジャン川に注ぎ込むブラガ川の上流に住むプナン人 (いわゆる、西プナン人) を対象に、フィールドワークを始めることになった。より精確には、1980年代に、ピーター・プロシウスやト田隆嗣さんが、あいついで調査研究を行なった、プナン・ガング (Penan Gang) と自称する人たちである。

熱帯雨林の中で狩猟採集にたよって生きる遊動民 (ノマド) であったプナン人の一部は、

1960年代に、サラワク州政府の定住化政策に応じて、その当時、無住の地であったブラガ川流域に住むようになった。その後、プナンは、移住していた場所から戻ってきたとされるクニャー(Kenyah)の人びとを隣人として暮らしている。

私がプナン人のロングハウスに住み始めて、最初に驚かされると同時に、悩まされたのは、次から次へと私に、人びとが金を融通してくれないか、金を貸してくれないかとのみにくることであった。プナン人は、彼らの住む土地の木々を商用に伐採することに対して支払われる賠償金を、木材会社から月ごとに受け取っている。そのような金を、彼らはつねにあてにして暮らしている。プナン人にとって、金銭とは、部分的に、他者から分かち与えられるものであり、なければ持っている人から借りるものである。あれば使い、なければ次月に分与される「見込み」を担保にして、借りようとする。そのようなプナン人の態度に対して、当初、私は大きな戸惑いを感じた。

近隣のクニャー人たちはいう。「プナン人たちは、今日のことしか考えない。明日のことを思いえがいて生きているのではない」と。金は、手に入ったときに無計画に、一気に使ってしまう場合が多い。食材や消費財は、なくなってからなんとかする、なんとかなるだろうと考えている。将来を期して備蓄するとか、準備するという精神性は、プナン人にはほとんどないように思える。ジャングルには、食べ物としての動植物が豊富にあって、なんとかして生きていくことができることを、ノマドの末裔たちであるプナン人たちは経験的に知っている。それゆえに、彼らには明日の心配は必要ないかのようである。

1983年に設立された村の小学校を卒業したプナン人が数えるほどしかいないということも、そのような傾向を示している。プナン人のロングハウスの通廊では、10歳前後の学齢期の少年少女が、たえずブラブラしている。次世代に学校教育を与えて、社会的に上昇させる準備をするという思いは、これまでのところ、プナン人にはないようである。

しかし、今日を生き、明日に備えることがないという一般的態度は、プナン人によってたんに生きられているわけではない。彼らは、今日、近隣のクニャーの人びとの経済的な成功を横目でながめて、狩猟に行くために四輪駆動車や船外機エンジンが欲しい、夜には毎晩、電灯が欲しい(=燃料が欲しい)と感じ、そのことを頻繁に口にするからである。その意味で、プナン人は、後発で近代へと参入した人びととして、苦悩を抱えている。

これに対して、プナンの人びとが、いきいきとして輝いて見えることがある。それは、彼らが、ジャングルにハンティングに出かけるときである。近隣のクニャー人たちは、ときどき、自家用の四輪駆動車にプナン人たちを乗せて、人があまり入ることがない、居住地から遠く離れたジャングルにまでつれていく。狩猟した獲物を持ち帰って村人たちに売り、ガソリンや銃弾などの諸経費を差し引いた儲けを山分けするためである。

ジャングルの中に入るとき、プナン人たちは、焼畑稲作を主生業とするクニャー人にとって、畏怖し、重んずべきハンターとなる。プナン人の狩猟の技量、ジャングルでの生活

能力には、クニャー人たちのそれらは、遠く及ぶことがない。ノマドの末裔であるプナン人たち、とりわけ、狩猟に熟達した30代～40代のプナン人男性たちは、ジャングルの妙を知り尽くした狩猟の達人なのである。

プナン人のハンターたちは、自家製の銃を担いで、何も言わずに、静かに、ジャングルの中に出かけていく。彼らは、イノシシやシカ類などの動物の足跡があるかどうかを目で確認する。それらがたくさんあればその近辺で獲物を追い、なければ場所を変えるか、樹上にサル類がいるかどうかに意を払う。そのように、目と耳を使って、ジャングルの中を進んでいく。人間が一方的に目と耳を使うだけではない。動物の目に触れないように、動物の耳へと届かないように、ハンターたちは身を低くし、物音を立てないように注意する。行く手に立ちだかる木々を身軽に乗り越え、身をひそめながら、進んでいくのである。

プナンのハンターたちによれば、ジャングルの動物たちは、人間が持っている匂いに対して敏感なのだという。人間の匂いがただけで、動物たちは逃げてしまう。そのため、獲物に人間の匂いを嗅がれないように、風を感じて、風上に向かって道を取ることが大事だという。いずれにせよ、ジャングルの中で、小柄で機敏なプナン人のハンターたちに着いていくことは、私にとって、かなり骨の折れることである。私は、もう少し若いときに、このグループの調査研究をしておけばよかったと、感じている。

現代社会の中で苦悩を抱える存在としてのプナン。ジャングルを細部にいたるまで知り尽くし、狩猟の技量と能力を存分に発揮して生きる存在としてのプナン。これまでの1ヶ月半ほどの現地滞在の間に、プナン社会のそのような二つのプロフィールが浮かび上がってきた。いましばらく彼らと共に暮らし、同時に観察をつづけることで、その両面から、プナン社会の現在を手がかりとして、人間存在について考えていきたいと思っている。

